



◇ 今回は木澤記念病院の金山佳史さん（岐阜大学医学部医学科卒）の報告です。

私は岐阜大学医学部医学科を卒業し、現在、木澤記念病院(美濃加茂市)の初期研修医 1 年目です。アメリカやオーストリアへの短期留学で学んだことを中心に、学生時代についてお話ししたいと思います。

<大学生時代の経験>

～～基礎医学教室への短期留学～～

3 年生では、分子病態学の研究室の教授が、「海外の一流の研究室を肌で感じてみないか」と提案してくださり、夏休みの 1 ヶ月間、アメリカの Rockefeller 大学の分子免疫学教室(教授がポスドク時代に所属していた研究室)に Visiting Student として訪問させていただきました。イタリア人研究員の研究テーマである「Double strand break(DSB)修復機構の解明」の実験において、ノックアウトマウスのジェノタイプングや大腸菌から遺伝子を組み替えたプラスミドの回収などを行った。



(分子免疫学教室の教授と)



(イタリア人研究員と研究室で)

～～海外臨床実習の短期留学～～

6 年生では、岐阜大学医学部海外臨床プログラムにより、オーストリアのウィーン医科大学皮膚科教室において、1 ヶ月の臨床実習を行う機会を得た。ウィーン医科大学の皮膚科教授に、志望理由と私自身のプロフィールを英文にして、海外留学実習を 1 ヶ月間、ウィーン医科大学の皮膚科でやらせていただきたいという趣旨のメールを送った。教授と全く面識もなく、岐阜大学とウィーン医科大学は提携していないにもかかわらず、奇跡的に「OK」という返事を頂き、実習先が決定した。語学ができなくても、熱い想いでチャレンジすることは大切であると感じた。

ウィーン医科大学(元ウィーン大学医学部)は、オーストリア大公ルドルフ 4 世の時代である 1365 年の設立で、ドイツ語圏最古の歴史を誇る大学である。大学病院 AKH(Allgemeines Krankenhaus)は、全部で 36 診療科、病床数は病棟 2 棟(21 階建て)で合計 2134 床の、世界第 2 位の病院である。(ちなみに岐阜大学病院は、約 600 床)

実習では、「general clinic」「dermato-oncology clinic」、「early recognition of pigmented lesions clinic」、「immune-dermatology・STD clinic」を見学した。医師と患者さんの会話は、ドイツ語(医師同士の会話もドイツ語のみ)で聞き取ることができなかった。私の臨床実習内容は、毎日外来診療を観察することと、見学した症例の中から、週に 2 症例、英語でスライドを作って、教授の前でプレゼンテーションすることだった。スライド作成のために、主訴・現病歴・皮膚所見・診断・治療について、必死に外来担当の医師に英語で

質問した。しかし、それだけでは情報が不十分だったので、患者さんのカルテ(ドイツ語)をコピーして、翻訳しながら患者さんの病状を把握した。スライドには、来院時の患者さんの皮膚症状を撮った写真(写真を撮ることだけの専門スタッフが常在している)も貼り付けた。プレゼンテーション後の、「あなたは、ドイツ語が全く聞き取れないし、英語もたどたどしいにもかかわらず、実際の患者さんの症状や治療計画まで、ポイントを押さえて、よくまとめている。」という教授の言葉は、とても嬉しかった。

第3週目の朝のミーティングに、自分が外来で見学した mastocytosis の症例発表と自己紹介を英語でプレゼンする機会をいただいた。発表時間は、3分以内。スライドには、「写真のみで、文字は極力なくすように。」と教授の指示があった。他の医師もみなスライドには、患者さんの皮膚症状の写真のみを提示してプレゼンしていた。教授は、私のスライド内容と発表原稿について、何度も指導してくださった。

自己紹介には、私の出身地、岐阜県関市の伝統産業の「刃物」・「鵜飼」の紹介も入れた。実習中に、ウィーン医科大学で使用している生検用パンチを見たら、驚いたことに、生検用パンチの外袋に、「岐阜県関市・カインダストリー」と印刷されていた。そこで、私の出身地の刃物会社がこの生検用パンチを輸出していると話したところ、「その町から来た医学生」ということで、会場がなごやかな雰囲気になった。40人の医師の前でスライド12枚の英語プレゼンを行い、さらにそのあとの Meeting が終わった時のことである。今まで私のことを無視していた女性医師から、「Well done!」と声をかけていただいたのが、非常に嬉しかった。



(ウィーン医科大学病院の入り口にて)

病院実習以外で経験したことも述べたい。

憧れのウィーンで、人生初のオペラ鑑賞(国立オペラ座: DON CARLO)やウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏(楽友協会の黄金ホール、シェーンブルン宮殿)を聴くことができた。モーツァルト、ベートーヴェンらの過ごした家を訪れ、その部屋の窓からみえる景色を自分も眺めながら、ここで、彼らは何を感じながら、曲を作っていたのだろうか、と勝手に妄想しながら、椅子に座って過ごす時間は、同じウィーンでありながら、病院の実習で感じる時間の流れとは異なり、心地よいものであった。私は、遊覧船に乗り、ヴァッハウ渓谷のドナウ川下りを楽しんだ。岸辺に建つ古城や修道院、ぶどう畑、小鳥のさえずりが聞こえる中、ゆったりと流れるドナウ川。この風景とドナウ川の流れをヨハン・シュトラウス II 世が「美しき青きドナウ」という楽曲にしたのだろう。私は、イメージにピッタリな世界だなあと思った。また、ウィーン国立音楽大学の学生さんが使用する大学の練習室で、持ち込んだ自分のヴァイオリンを弾く機会を得た。一流の音楽家になる方と同じ環境で、ウィーンの空気を自分の楽器に吸わせてあげられたことは、とてもありがたかった。日本の空気感と違って。1447年から営業しているウィーン最古のレストラン「Griechenbeisl(グリーンヒェンバイスル)」で食事をした。そのお店の小部屋の1つに、「Mark Twain Zimmer(マーク・トゥエインの間)」があり、天井に、モーツァルト、ベートーヴェン、ワーグナーといった歴史的に有名な音楽家たちの自筆サインが書かれていた。彼らと時間を超えて、食事をしながら同じ空間を共有できたことは、感慨深かった。

日常生活では、オーストリアは、時間を守るという意識は、非常に高い。また、高緯度地域のウィーンでは、夕方が長いので、仕事をきっちり時間までに終えて、カフェでピアノ演奏を聴いたり、絵画や文学を友

人と議論して楽しんだり、オペラやクラシックの演奏会に出かけて、体が踊りだしてしまいそうなほど楽しんでいる。そのウィーン市民を見ながら、日本の遅くまで過剰に労働して、忙しすぎる日本人のあり方に疑問を感じた。

言葉の壁があることは、出発前から覚悟をしていたが、それが想像以上に高く厚かった。私に医学の議論をするだけの語学力がないために医師達に質問をしても、私は医師に無視され、医師は走り去ってってしまうという現実の厳しさも味わった。しかし、「解決すべきことは何か」を考えて、自分の行動のしかた、コミュニケーションのとり方を少しずつ変えることで、1つ1つ少しずつ前に進むことができた。

留学させていただいたおかげで、始めの一步を踏み出す勇気とその後の積み重ねの大切さを認識できた。将来医師になった時も、挑戦を恐れずに努力することが、今回の経験を活かすことなのだと思う。

～～部活動～～

岐阜大学医学部室内合奏団に所属していた。8月に行われる定期演奏会の他に、司祭やクリスマスコンサートにて岐阜大学付属病院で演奏したり、名古屋大学付属病院でヴァイオリンのソロ演奏を行ったりと、患者さんへのボランティアコンサートを行ってきた。コンサートマスターを2年間やり、リーダーシップやチームワークづくりをした経験や芸術を通して感性を磨くことは医者の仕事においても大事であると思っている。

<研修医になって>

夜間当直を初めて任された時、必要な問診力、診察力、手技、判断力が圧倒的に不足していることを痛感した。自分の不甲斐なさに落ち込むことが多く、こんな自分が医師になってよかったのだろうかと自問する毎日である。医師になって半年経った今、指導医の先生方をはじめ、コメディカルのスタッフからも熱心に指導をして頂き、ほんの少しずつ対応できることが増えてきた。

また、患者さんを診察し、データと向き合う毎日の中で、どうしてもその人の病気のことばかりに目を向けてしまっている。医師として患者さんの状態を把握し、方針を立てることは大切である。しかし、それだけではなく、患者さんが今、「何を不安に思い、どうして欲しいのか」、その訴えに寄り添い、共感できるように努力したい。早く立ち立ちできる医師となって、患者さんのためにも医療に貢献できるよう精進していきたい。